

New Year's Issue  
2018

# Living the LOTUS

Buddhism in Everyday Life

年頭法話

## 『自立した信仰へ』

立正佼成会 会長 庭野日鏡

教団創立八十周年の節目  
礎を築いた先達のご恩に報いる決意



あけまして、おめでとうございます。

昨年、私は、年次方針を通して、『「有り難し（ありがたい）」「感謝（ありがとう）」のころを、日常生活の中で表現し、実践してまいりましょう』と申しあげました。このことを、大勢の信者さんが、自分の「テーマ」にされ、職場や地域、家庭で実践してこられたことを、教会長さんをはじめさまざまな方からお聞きしました。また大聖堂の体験説法からも、うかがい知ることができました。

釈尊の教えを突き詰めると、最後は、「有り難し」「感謝」に行き着くと教えられています。この一番大事なことを、これからも常に心に刻んで、精進してまいりたいと思います。

さて今年、本会は、教団創立八十周年の節目を迎えます。八十年という歳月さいげつの中では、開祖さまが五十四年、私が二十六年、会長の役を務めてきました。

# New Year's Message

振り返りますと、開祖さまも私も、一貫して仏さまの教えをお伝えし、それを信者さんが真摯に受けとめ、実践してくださった——簡潔に表現すれば、そのことに尽きると思っています。

その中でも、開祖さまが本会を創立され、次第に法の輪が広がっていった時期は、戦前、戦中、戦後という、まさに激動の時代でした。当時は、貧病争の苦しみから逃れることが、人々にとって最大の願いでもありました。そして、本会の先輩幹部さんたちは、自らも困難な状況にありながら、優しく、時には厳しく、また方便を駆使して、人々を救い、仏道に導いてこられました。

総じて昔の幹部さんたちは、あまり長い話をせず、簡潔な言葉で、人の心を動かす力があつたと思います。時には、突き放すような表現に聞こえても、そこには、相手の幸せを一心に願う深い愛情がありました。

「人さまを何とかお救いしたい」——その慈悲の心が、脈々と受け継がれて、今日の佼成会の土台になっていったのであります。

そうした諸先輩への感謝の思いも込めて、私は、「平成三十年次の方針」を次のように示しました。

天地自然は、一瞬もとどまることなく、創造、変化を繰り返しています。私たちもまた、天地の道理の如く、停滞することなく、何事に対しても、日々

新たな気持ちで取り組んでいくことが大切であります。」

今年、本会は創立八十周年の節目を迎えました。その今日に及ぶ歴史の礎は、開祖さま、脇祖さまをはじめ、先輩の幹部の皆様、信者さんの寝食を惜しまぬご尽力によって築かれてきたものです。

この記念すべき年に当たり、教団創立百年に向けて、一人ひとりが、創造的な歩みを進める確たる志をもって、そのご恩に報いてまいりたいと思います。

「方針」では、先達に恩返ししていく大切さと同時に、組織も個人も、常に「創造」を志すことが肝心であることをお伝えしました。

このことについて、中国の『淮南子』という書物に、印象深い言葉が遺されています。

「行年五十にして四十九の非を知る。六十にして六十化する」

五十歳になったら、それまでの四十九年の生き方を反省し、また新たな気持ちで再出発する。六十歳になったら、その歳に相応しい変化を志す、という意味合いです。

五十歳、六十歳といえは、人間としてある程度出来上がってくる時期です。それでもなお新鮮さを失わず、進化し続ける。それは、維新——絶えざる創造——ということであり、どんな年齢の人にも当てはまることではないでしょうか。

創造的に生きる志を皆が宿している  
それに気づき、発揮するだけでいい

ただ、この「創造」という言葉は、一般的に、あまり身近な印象を持たれていないようです。辞書を

引くと、「それまでなかったものを初めて作り出すこと」とあります。これでは、ハードルが高いと

思ってしまう人がいても仕方がないのかもしれませんが。

私は、「創造」ということを、もっと身近に捉え（とら）ています。草木が一日一日、わずかずつ生長していくように、「朝のあいさつができるようになった」「こんなことに気づけた」「昨日より成長できた」——これが、一人ひとりにとっての「創造」なのだと思います。

そもそも人間には、現状に甘えずに、もっと成長をしたい、発展をしたいという心が、皆にあるといわれています。そして、少しでも高く、尊い、大いなる存在に向かっていこうという本能も、皆が持っているといわれています。

言い換えれば、誰もがすでに、創造的に生きる志

（しんちゅう やど）を心中に宿しているのであり、それに気づき、発（はっ）揮（き）するだけでいい、ということでもあります。

「志」という文字は、「十」の下に「一」があり、その下に「心」があります。「十」は、たくさんある人間の欲求、欲望（心）を表していて、「一」は、それを一つにまとめるという意味があります。

ああしたい、こうしたいと心が散漫（さんまん）になっていると、なかなか前に進むことができません。まずは目標を一つに絞（しぼ）り込んで、集中して取り組むことが大切ということです。

一つの目標に精いっぱい力を注ぎ、それが達成できたら、また新たな目標に挑戦（ちようせん）する。その繰り返し（ちようせん）が、いわば、私たちにとっての維新——絶えざる創造——ということなのであります。

## 「人を植える」という命題に 全力を尽くすことが、私たちの務め

二十年前、本会は、教団創立六十周年を期して、『一人ひとりの心田を耕す佼成会』の総合目標（かか）を掲げました。そして、この二十年の間に、一つ一つ新生がはかられ、目標とする方向へ着実に前進してきました。

また創立七十周年の年から、全会員へのご本尊勧請を推進し、取り組んでまいりました。このことを通じ、本会において仏教（さんぼうきえ）の三宝（じょうじゆ）帰依の基本が成就したといえます。そして、十年の間に、ご宝前を中心にした家庭が確実に増え、定着してきました。

このような経緯（けいゐ）を踏まえ、来たるべき百年、つまり教団創立から一世紀を展望して、人材育成——人（てんぼう）を植える——という根本命題（こんぽんめいだい）に全力を尽くしていくことが、私たちの大事な務めでもあります。

では、どのような人を育成していけばいいのでしょ

う。それは「仏さま及び開祖さま・脇祖さまの人を慈（いつく）しみ思いやるころ、人間本来のころ（明るく優しく 温かく）を持って、菩薩道（じんどう）（人道）を歩む人」にほかなりません。

では、どのようにすれば、そうした人づくりができるのでしょうか。それは、「ご供養」「導き・手どり・法座」「ご法の習学」という「三つの基本信行（てってい）」を徹底することです。

二宮尊徳翁（にのみやそんとくおう）の歌に「この秋は 雨か嵐か知らねども 今日（けふ）のつとめの田草（たぐさ）取るなり」とあります。

秋になると雨が降ったり、嵐が来たりして、稲作がどうなるか分からない。しかし、いまはとにかく目の前の雑草を取り除いていくことが大切なんだ、という意味です。

# New Year's Message

この歌は、私たちが、いま為すべきことは何かを示唆しているように思えます。

私も田植えをしたことがあります。苗を植えてから、一、二週間すると、雑草が生えてくるので、取り除きます。それも、一番草、二番草、三番草と三回ほど作業をしなければなりません。取り除いた草は、捨てるのではなく、田の泥の中に埋めます。それが、稲の肥やしになっていくのです。

これと同様に、人づくりを進めるには、「三つの基本信行」をコツコツと実践することが基盤となります。そして、家族同士、サンガ同士が、励まし合い、学び合い、共に成長していくことを通して、やがては、「実りの秋」を迎えるのであります。

人間は、先々のことが気になると、つい目の前のことに力が入らなくなります。

しかし、私たちの人生の中で、最も重要なのは、いつも「いま目の前にあること」です。なぜなら、私たちが使える時間は、過去でもなくて、未来でもなく、「いま」しかないからです。いまこの瞬間の出来事に一つ一つ丁寧に取り組む——それが積み積みもって、人生を充実したものにしていくのです。

私は、少し前まで、本会の創立百年を、まだだい

ぶ先のこととっていました。しかし、あと二十年となると、ずいぶん差し迫ってきた感じもします。

これまで私は、「釈尊が私たちにお伝えになりたかった根本の精神を把握していこう」と、繰り返し皆さまに申し上げてきました。

つまり、いま自分が、いかに恵まれているかに気づき、一見不都合と思われることの中に、仏さまの説法を見出していくこと。自も他も共に救われることが、真の幸せであることに気づくこと。つい頼ってしまう信仰から、主体的で、自立した信仰へと生まれ変わり、「自灯明・法灯明」を胸に精進していくこと。端的に言えば、これが釈尊の教える本質的な救われであり、「心田を耕す」ということであります。

創立百年に向け、私が願うのは、一人でも多くの信者さんが、仏教徒として、真の宗教者として成長されることです。

私も、皆さまと共に、急がず、息まず、そして、あらゆる時と場で、心田を耕し続けてまいりたいと思います。

(『佼成新聞』平成30年1月7日号より)

